

## ルカの福音書3章「バプテスマー神と人との接近」

### 1A 主の道の用意「悔い改めのバプテスマ」1-20

#### 1B 罪の赦しの説教 1-18

##### 1C 背景 1-6

##### 1D 歴史 1-2

##### 2D 聖書 3-6

#### 2C 内容 7-14

##### 1D 神の怒り 7-9

##### 2D 悔い改めにふさわしい実 10-14

#### 3C 目的 - キリストの到来 15-18

#### 2B 悪事に至る責め 19-20

### 2A 人の道の用意「民衆と一しょのバプテスマ」20-38

#### 1B 神による任命 21-22

#### 2B 神に至る系図 23-38

##### 1C マリヤの先祖

##### 2C アダムの子

##### 3C 神の子

## 本文

私たちは、バプテスマのヨハネの誕生と、イエスのご降誕、そしてその成長の話を読み終わりました。そしてついに、イエス様が公の働きを始めることとなります。福音書の全てにおいて、そして使徒の働きにおいて、メシヤが来られる、あるいは神の国が到来するということに対して、バプテスマのヨハネの働きを書き記しています。それは、イエスご自身の働きを受け入れるには、ヨハネの働きによる道備えが必要だからです。

彼の父、ザカリヤがこの子の誕生において預言しました。「主の御前に先立って行き、その道を備え、神の民に、罪の赦しによる救いの知識を与えるためである。(1:76-77)」前回の学びでは、シメオンが赤子イエスを見た時に、「私の目があなたの御救いを見たからです。(2:30)」と預言しましたが、救い主はイエス様です。けれども、何からの救いであり、何をもって救いを受けるのか、多くの人が分からないでいます。イエスが救い主であると告げても、それが自分に当てはまることとして捉える人は少ない訳です。そこでバプテスマのヨハネの働きをじっくりと見ることは、神の救いを受け入れるための重要な一歩となります。

### 1A 主の道の用意「悔い改めのバプテスマ」1-20

#### 1B 罪の赦しの説教 1-18

##### 1C 背景 1-6

## 1D. 歴史 1-2

3:1 皇帝テベリオの治世の第十五年、ポンテオ・ピラトがユダヤの総督、ヘロデがガリラヤの国主、その兄弟ピリポがイツリヤとテラコニテ地方の国主、ルサニヤがアビレネの国主であり、3:2 アンナスとカヤパが大祭司であったころ、神のことばが、荒野でザカリヤの子ヨハネに下った。

バプテスマのヨハネに神のことばが下った歴史的背景を記しています。皇帝テベリオが、イエスのご降誕の時の皇帝アウグストを引き継ぎ、皇帝になっています。時は、紀元後 29 年のことです。けれども、実際にイスラエルの地を統治しているのは、ここに書いている人物たちです。皇帝と良い関係をもっていたヘロデ大王が、本人はイドマヤ人でありましたが、ユダヤ教に改宗した者としてユダヤ人の王として君臨しました。彼の死後、そこがヘロデの息子たちに分割されました。ユダヤ地域はアルケラオスが支配しましたが、彼の悪政により追放され、そこはローマ直轄の属州になり、ピラトが総督として統治しました。

ここにある歴史的な状況は、「時が満ちた」という言葉で言い表すことができます。前回お話ししたように、ダニエル書 7 章にローマが鉄の獣として描かれており、征服する民をことごとく牙で噛み砕く姿が描かれていました。パックス・ロマーナと呼ばれる平定によって秩序はありましたが、一般の民は圧迫を受けていました。政治家らが語るその「言葉」は空疎なものであり、人々の不満は鬱積していました。その中で必要だったのは、人ではなく「神のことば」でありました。

ところが、その時に神の律法を任せられた祭司たちの間にも、混乱がありました。アンナスとカヤパが大祭司であったとありますが、カヤパはアンナスの義理の息子ですが、それはローマの意向によって大祭司になりました。アンナスがユダヤ人の中では精神的な大祭司であり、それでカヤパが大祭司となってもアンナスをそのまま大祭司とみなしたという状態です。彼らの中に政治が入ってきており、彼らの属していたサドカイ派はローマとの妥協によって、神殿礼拝を守るために現実路線を取っていました。神の律法は彼らによって解釈はされましたが、力を持っていなかったのです。

その中で、「神のことば」がヨハネに下りました。この「ことば」は、ギリシヤ語でレーマであり、ロゴスではありません。ロゴスは神の書かれた言葉ですが、レーマは神に語られた言葉です。最後の預言者マラキ以来、約四百年後に与えられた生きた御言葉です。イスラエルにとっては、ちょうど族長に語られてから四百年後にモーセに主が現われてくださったような、途方もない長い期間でありました。

そして、ヨハネは神の律法と預言にあるものを、その時代の民にまっすぐに語り、人々に力を与えたその言葉を語ったのです。そして「荒野」にヨハネはいたとありますが、ちょうどユダの荒野であると考えられます。死海の北、エリコのそばの辺りにありますが、「荒野」というのは十戒が与えられたのも荒野であり、ダビデがサウルから逃げて神に祈り求めたのも、ここユダの荒野であり、主が特別に啓示を与えてくださる場所としてふさわしいところです。

私たちにも、靈的復興が日本で起こることを願わざるを得ません。そこには、ユダヤ人たちの間にあるように、歴史的背景にある時があると思います。韓国でリバイバルが起こったのは、朝鮮戦争という悲惨の後でした。中国のリバイバルも文化大革命という試練を通してのものでした。アメリカのヒッピーの間にあったイエス革命も、ベトナム戦争や冷戦の混乱期に、物質主義の中にあっただアメリカで、生きた神の御言葉が語られる人々によって起こったリバイバルです。リバイバルは、誰かが始めるものではなく、時が満ちるときに神が行ってくださることです。

そして、そこで神のことばが語られます。それは、その世代の人々にレーマとして語られる、書かれた御言葉が生きた神の言葉として語られる時であります。ヒッピーで伝道者として用いられたロニー・フリズビーについて、チャック・スミスが初めて会った時に、「まるで福音書のイエスにつきさつき会ってきたばかりのように、恵みを分かち合っていた。」と述懐しています。

## 2D. 聖書 3-6

3:3 そこでヨハネは、ヨルダン川のほとりのすべての地方に行って、罪が赦されるための悔い改めに基づくバプテスマを説いた。

場所は、「ヨルダン川のほとり」であります。父ザカリヤに対してガブリエルが、ヨハネが「エリヤの霊と力で主の前ぶれをし(1:17)」と予告しました。エリヤは、アハズ王に雨が降らなくなることを告げると、ヨルダン川に生き、そこで水を飲み、鳥が持ってくる肉とパンで命をつなぎました。そして、エリヤはエリシャが付いてくるところで外套でヨルダン川を分け、そこから火の戦車によって天に引き上げられました。さらに遡ると、神の約束が実現していくのはヨシュアたちがヨルダン川を渡るころから始まります。したがって、ここから新たに神の約束が実現していくその分岐点であるわけです。

そして、大事なのはどのような言葉か、メッセージだったのかということです。「罪が赦されるための悔い改めに基づくバプテスマ」ということです。バプテスマというのは、浸かることです。あまり深く、難しく考えないほうがいいです。例えば、ある人が自分の親が死んで悲しみの中に沈むとき、その人は、「悲しみのバプテスマを受ける。」とすることができます。したがって、「悔い改めに基づくバプテスマ」とは、本当に自分自身のことを悔いて、真剣に神を求めることを意味します。

ここに、福音の始まりがあります。18 節にヨハネは、福音を知らせたとありますが、福音は悔い改めから始まります。悔い改めがないところに、イエスの福音を聞いて信じるという働きは決して起こりません。イエスが来られても、悔い改めの心がなければこの方を受け入れようがないのです。ここが、私たちが伝道しようとする時に福音が拒まれていく原因であり、またキリスト者として靈的成長ができない理由となっています。

「悔い改め」という言葉を聞くときに、何らかの行ないを変えなければいけないという印象がこの日本語には与えられます。例えば、たばこを吸うのをやめなければクリスチャンになれない、教会

に集っている他の人々のように自分が行ないを正して、身だしなみをしなければクリスチャンになれないと考えます。しかし、聖書の語る悔い改めは、もっと深いものです。次に、ある牧師が書いた文章を引用します。

\* \* \* \* \*

聖書では、「悔い改め」と訳されているギリシャ語の「メタノイア」は、もともと「考えを変える」「心を変える」という意味です。ここには「後悔」や「行いを改める」という意味は最終的には含まれてはいますが、しかし第一ではありません。悔い改めというのは、まず考えを変えることです。では、考えとはなんのでしょうか。それは「私はこの人生を自分の好きなように生きていこう」という考えです。この考えは、ほとんどすべての人の心にあるものです。一般的には、当たり前な考えと言っていいかもしれません。自分の人生は自分だけのものだ。だから、自分の力で、自分の好きなように生きるのが当然だ。そう思うのは特別なことではありません。ほとんどの人々がそう考えているのです。ところが聖書からすると、この考えが「罪」の姿の最たるものなのです。この考えに基づいて生きることによって、私たちは自分自身と他者とを限りなく傷つけていく。ここが変わること、それが悔い改めです。

どう変わるのかといえば、「私の人生は神のものだ。神の御心に従って生きていこう」と変わるのです。つまり、自分の人生の主権、主導権を、自分のものにするのではなく、神にお返しするのです。言ってみれば、それまで自分で操縦していた船の舵を、神にお渡しして、神に操縦していただく。これが悔い改めです。そもそも、聖書からすれば私たちは神によって造られたものです。私たちは自分でこの人生を始めたわけではありません。始めたのは、神なのです。私たちの本当の主人は、自分ではなく神なのです。それなのに、私たちはこの事実を無視してどんどん神から離れていきます。しかし人生のどこかで神の福音を聞いて、「自分の人生は神のものなんだ」というこの事実を受け入れ、そして人生の主権、舵を神にお返しして、「あなたに従って歩ませてください」と自らを神にゆだねること、これが悔い改めなのです。この最も深いところにある人生を生きていくうえでの原則が変更される、そして自分中心から神中心の歩みへ変えられるのが悔い改めなのです。表面的に「行い」を後悔して改めることではありません。<sup>1</sup>

\* \* \* \* \*

そして悔い改めは、「罪の赦し」をもたらします。ここにおいても、多くの日本人はつまづきます。自分が過ちを犯したことを認めると、自分を赦せなくなります。だから、なかなか罪の告白ができないとも言えるでしょう。しかし、神は一貫して、悔い改めて神に立ち返る人に対して、豊かな憐れみと罪の赦しをもたらすことを行なっておられます。「わたしは悪者の死を喜ぶだろうか。・・神である主の御告げ。・・彼がその態度を悔い改めて、生きることを喜ばないだろうか。(エゼキエル 18:23)」罪を認めることは、自分に死をもたらすのではなく、むしろ命をもたらすのです。これが神の憐れみであり、恵みなのです。ここを一心に受け入れなければいけません。

---

<sup>1</sup> 信仰の救急箱 34 ページ <http://pastor-maiku.jimdo.com/信仰の救急箱/>

3:4 そのことは預言者イザヤのことばの書に書いてあるとおりである。「荒野で叫ぶ者の声がある。『主の道を用意し、主の通られる道をまっすぐにせよ。3:5 すべての谷はうずめられ、すべての山と丘とは低くされ、曲がった所はまっすぐになり、でこぼこ道は平らになる。3:6 こうして、あらゆる人が、神の救いを見るようになる。』」

これはもちろん、イザヤ書 40 章からの引用です。前回、シメオン、イスラエルが慰められることを待ち望んでいた人であることが紹介されていましたが、それもイザヤ書 40 章から来ています。読んでみましょう。「慰めよ。慰めよ。わたしの民を。」とあなたがたの神は仰せられる。「エルサレムに優しく語りかけよ。これに呼びかけよ。その労苦は終わり、その咎は償われた。そのすべての罪に引き替え、二倍のものを主の手から受けたと。」荒野に呼ばれる者の声がある。「主の道を整えよ。荒地で、私たちの神のために、大路を平らにせよ。すべての谷は埋め立てられ、すべての山や丘は低くなる。盛り上がった地は平地に、険しい地は平野となる。このようにして、主の栄光が現わされると、すべての者が共にこれを見る。主の口が語られたからだ。」(1-5 節)」

これが、イスラエルに対する慰めです。「慰めよ、慰めよ」という呼びかけから始まっています。そして、その慰めは、エルサレムに対して豊かな罪の赦し、二倍の赦しが与えられるところに現れます。その慰めを受けるために、ここにあるように、「主の道を整えよ」と叫ぶ声があるのです。

これは、王がある地方を通るとき、その前にやって来て、道を整えるように命じる人が来ることを話しています。平らな道にするために、へこんでいるところは埋めて、高くなっているところは低くされます。これを同じように、人々の心の中で行うというのがこの預言の内容です。マリヤがエリサベツと会い、主へ賛歌を歌った時のことを思い出しますか？「主は、御腕をもって力強いわざをなし、心の思いの高ぶっている者を追い散らし、権力ある者を王位から引き降ろされます。低い者を高く引き上げ、飢えた者を良いもので満ち足らせ、富む者を何も持たせないで追い返されました。(1:51-53)」心の高ぶりが砕かれます。そして反対に低くされている者たちが引き上げられます。

そのことによって、「あらゆる人が、神の救いを見るようになる。」とあります。これが高いところにいる者たちを低くする目的です。世は、高いところにいる人々のようになりなさいと教えます。財産、流行、学位、他にもあらゆる形で高められることを教えます。しかし、自己を高められるように求められるところには神の栄光は見えません。イエスが、ベツレヘムの飼いやおけでお生まれになり、羊飼いがそれを礼拝して、しかもその両親は貧しい家庭であったというように、低い者のみがこの方に会う特権に預かれるのです。反対に低められている者には、大いなる霊的祝福があります。その人は幸せ者になり、高く引き上げられるのです。

## 2C 内容 7-14

### 1D 神の怒り 7-9

3:7 それで、ヨハネは、彼からバプテスマを受けようとして出て来た群衆に言った。「まむしのすえたち。だれが必ず来る御怒りをのがれるように教えたのか。3:8 それならそれで、悔い改めにふさ

わしい実を結びなさい。『われわれの先祖はアブラハムだ。』などと心の中で言い始めてはいけません。よく言うておぐが、神は、こんな石ころからでも、アブラハムの子孫を起こすことがおできになるのです。3:9 斧もすでに木の根元に置かれています。だから、良い実を結ばない木は、みな切り倒されて、火に投げ込まれます。」

ヨハネは、エリヤの霊と力で預言を行っています。マラキ書の最後にこう預言があります。「見よ。わたしは、主の大いなる恐ろしい日が来る前に、預言者エリヤをあなたがたに遣わす。彼は、父の心を子に向けさせ、子の心をその父に向けさせる。それは、わたしが来て、のろいでこの地を打ち滅ぼさないためだ。(4:5-6)」主の大いなる恐ろしい日、終わりの日の大患難が地上に降り注ぐ預言です。エリヤを始めとして、その後現れた数々の預言者たちは、イスラエルとユダに下る激しい神の怒りを預言しました。そして、「主の日」と神が定められている患難が終わりの日に下り、それで悔い改めて神の救いを得なさいというメッセージを行っていました。

ヨハネからバプテスマを受けようとして群衆が来ています。彼らは、ヨハネの悔い改めの言葉を聞いて、それで受けようとしていたのですが、ヨハネは彼らの救いの基がアブラハムの子孫だから、という誤った考えを持っているのを責めています。まず、アブラハムの子孫ではなく、「まむしのすえたち」と呼んでいます。聖書では、ペリシテ人など、神の裁きを受ける邪悪な国民に対して使っている表現です。ユダヤ人は、終わりの日に救われることが預言書に数多く書かれています。しかし、それは残された者たち、へりくだって、真実に悔い改めた者たちが救われることを教えています。ところが、いつの間にかユダヤ人であれば、アブラハムの血縁的子孫であれば救いを受けると考えたのです。

しかし「子」という言葉は、聖書では従順を意味しています。「光の子」と言えば、聖さの中に生きている信者のことを話しています。サラの子と言えば、サラが夫アブラハムに従ったように、夫に従う妻のことを差しています。イエス様をご自分を殺したいと殺意を抱いていたユダヤ人に対して、彼らは自分たちの父はアブラハムだと言ったのですが、「あなたがたは、あなたがたの父である悪魔から出た者であって、あなたがたの父の欲望を成し遂げたいと願っているのです。(ヨハネ 8:44)」とはっきりと語られたのです。神にはえこひいきはないのです。「患難と苦悩とは、ユダヤ人をはじめギリシヤ人にも、悪を行なうすべての者の上に下り、栄光と誉れと平和は、ユダヤ人をはじめギリシヤ人にも、善を行なうすべての者の上にあります。神にはえこひいきなどはないからです。(ローマ 2:9-11)」

私たちキリスト者に対しても、同じ警告が当たられています。「自分は神の子どもだ」と言っていることが、その人が神の子供になっている証拠とはなりません。「罪のうちを歩む者は、悪魔から出た者です。悪魔は初めから罪を犯しているからです。神の子が現われたのは、悪魔のしわざを打ちこわすためです。だれでも神から生まれた者は、罪のうちを歩みません。なぜなら、神の種がその人のうちにとどまっているからです。その人は神から生まれたので、罪のうちを歩むことができないのです。そのことによって、神の子どもと悪魔の子どもとの区別がはっきりします。義を行な

わかない者はだれも、神から出た者ではありません。兄弟を愛さない者もそうです。(1ヨハネ 3:8-10)」

そして「それならそれで、悔い改めにふさわしい実を結びなさい。」と言いました。真実に悔い改めたのであれば、その人のうちに必ず行ないの実が結ばれます。行ないによって実を自分で結ばせるのではなく、悔い改めによって行いに導かれ、結果として実を結びます。しばしば、「悪かった、赦してくれ」とお願いする、横暴な夫の言葉がありますね。妻がもう実家に戻るといったら、そのように言って戻って来てくれるよう懇願します。しかし、戻って来たら同じことを繰り返します。彼は、妻がいなくなったことで自分が惨めな思いになっているから謝っているのであって、悔い改めていないのです。悔い改めとは、自分が惨めになったからではなく、神に対して傷を与えてしまった、神に害を与えたという、神を信じているからこそ生まれてくるものです。先ほど話したように、神中心の生活に軸足を移します、と言う告白であります。

そしてヨハネは、「神は、こんな石ころからでも、アブラハムの子孫を起こすことができになるのです。」と言いました。これは神の力を示しています。アブラハムの子孫というものを大事にしているけれども、もっと大事なのは石から子孫を起こすような復活の力なのだ、ということです。私たちが、礼拝において、全き信仰をもって御言葉を聞き、それに応答しようとする時に、イエス・キリストの復活の力が働き、自分ではなく神の力によって変えられるのです。

そして「斧もすでに木の根元に置かれています。」と言いました。それだけ神の国の到来が切迫しているのだということです。さらに「だから、良い実を結ばない木は、みな切り倒されて、火に投げ込まれます。」と言いましたが、神に選ばれた理由は実を結ぶためであります。もし実を結ばなければ、役に立たないものであり、捨てられます。イエス様も、ぶどうの木とその枝の例えで、イエスに留まれば多くの実を結ぶが、実を結ばない枝は火で焼かれることを語られました。その人の生活に変化の見えない人は、その人がクリスチャンだと言っているながら、実はクリスチャンではないのです。

## 2D. 悔い改めにふさわしい実 10-14

3:10 群衆はヨハネに尋ねた。「それでは、私たちはどうすればよいのでしょうか。」3:11 彼は答えて言った。「下着を二枚持っている者は、一つも持たない者に分けなさい。食べ物を持っている者も、そうしなさい。」3:12 取税人たちも、バプテスマを受けに出て来て、言った。「先生。私たちはどうすればよいのでしょうか。」3:13 ヨハネは彼らに言った。「決められたもの以上には、何も取り立ててはいけません。」3:14 兵士たちも、彼に尋ねて言った。「私たちはどうすればよいのでしょうか。」ヨハネは言った。「だれからも、力づくで金をゆすったり、無実の者を責めたりしてはいけません。自分の給料で満足しなさい。」

群衆の「それでは、どうすればよいのでしょうか」という問いに対して、ヨハネが勧めたのは全て他者に対するものです。イエス様が最も大切な教えとして言われたように、神を愛する者は、そのま

ま隣人を自分自身のように愛することにつながります。この二つを分離することはできません。神を愛する人は、その愛がその人に留まり他者を愛します。そして他者を愛するためには、自分でやるのではなく、神の愛を自分のうちに留まらせます。

群衆に対して話しているのは、「下着を 2 枚持っている者は、一つも持たない者に分けなさい。食べ物を持っている者も、そうしなさい。」という言葉ですが、律法においては何度となく貧しい者に対して施しをしなければいけないことを教えています。その教えは新約時代の教会に受け継がれています。「父なる神の御前できよく汚れのない宗教は、孤児や、やもめたちが困っているときに世話をし、この世から自分をきよく守ることです。(ヤコブ 1:27)」

そして特筆すべきは、取税人が来ていることです。取税人は、ユダヤ人に憎まれていました。ユダヤ人はもともと、ローマに納税することを嫌いました。自分たちがローマに從属していることを認めたくなかったからです。なのに、ローマの肩入れをしたのが取税人です。ローマは、取税人が決められた額以上に課税しても何も文句を言わなかったのも、彼らはその差額を手に入れていました。しかし、すべての者が神の救いを見えるというイザヤの預言のように、このような者たちに対しても福音は存在するのです。

しばしば教会が、ある一定の人々を受け入れないという過ちを犯します。一つの信条が強くなる時、それは確かに高尚な基準なのかもしれませんが、それを前面に出すことによって、人々を排除してしまうのです。しかし福音は、すべての人々に与えられるものです。例えば、居酒屋で働いている人が来た時に、どうでしょうか？もちろん、酒に酔いしれることが罪であることは、キリスト者が御霊に満たされる中でしっかりと守らなければいけないことです。しかし、それをいつも話していたときに、キリストの福音から何かしらずれてしまいます。

さらに、兵士たちも来ています。これはローマ兵ではなく、おそらく取税人を護衛するためのユダヤ人たちの兵たちだと言われています。ヨハネはユダヤ人の中の預言者なので、この時にローマ兵が来ていると考えにくいからです。彼らに対しても、その力を乱用して人々から金を取ることをやめなさい、と勧めました。ですから群衆に対しても、取税人に対しても、そして兵士に対しても、貧しい人や弱者から奪い取ってはいけないという、モーセの律法を具体的に適用できるよう教えたのです。

ここで大事なことは、取税人に対しても兵士に対しても、その職を止めなさいと言っていない事です。取税人が徴税することそのものは、神から来たものであります。当時のユダヤ人は、ローマに納税することそのものに怒りを覚えていました。しかしヨハネは、その権威を否定しなかったのです。しかし、神から与えられた権威だから、それをきちんと管理する人になりなさいということも教えたのです。同じように、兵士をやめなさいと言いませんでした。警備すること、武力を行使することそのものを否定せず、それも神から与えられた権威だと認めたのです。しかし、それを乱用してはならない、やはり良き管理者になれ、と教えたのです。これは新約聖書の教えであります。「人

はみな、上に立つ權威に従うべきです。神によらない權威はなく、存在している權威はすべて、神によって立てられたものです。(ローマ 13:1) またこうも言っています。「あなたがたは、だれにでも義務を果たしなさい。みつぎを納めなければならない人にはみつぎを納め、税を納めなければならない人には税を納め、恐れなければならない人を恐れ、敬わなければならない人を敬いなさい。(ローマ 13:7)」

ですから、直接的に不法なことを行なっていない限り、教会において、職業によって差別をしてはいけないと思います。主から与えられた良心にしたがって、やめるべきだと考えれば、神が機会を与えてくださった時にやめればよいのです。「おのおの自分が召されたときの状態にとどまっていなさい。奴隷の状態で召されたのなら、それを気にしてはいけません。しかし、もし自由の身になれるなら、むしろ自由になりなさい。奴隷も、主にあつて召された者は、主に属する自由人であり、同じように、自由人も、召された者はキリストに属する奴隷だからです。あなたがたは、代価をもって買われたのです。人間の奴隷となつてはいけません。兄弟たち。おのおの召されたときのままの状態、神の御前にいなさい。(1コリント 7:20-24)」今の風潮であれば、東電に勤めておられる方が教会に来ることは非常に辛いことでしょう。自衛隊の方はどうでしょうか？主がそれぞれに与えられたその場所で神に仕えるべきです。しかし、もしそれが主に喜ばれないと示されるならば、その機会が与えられた時にやめればよいのです。

このようにヨハネは、当時のユダヤ社会にあつたような、ローマに対する政治的な反発を説くことはしませんでした。むしろ、ユダヤ人自身が神に対して罪を犯しているという、内部の改革を説きました。そして、そしてその悔い改めは、他者を憐れみ、他者の基本的な必要を満たし、弱い人に自分のものを分かち合い、自己中心的になって他者に傷を与えるようなことをやめるというところに現れています。

今日は、ここまでにしたいと思います。内容がとても深いです。主の道を備えるということが、悔い改めるということを話しました。福音は、この悔い改めから始まります。私たちに与えられている戒めをはたして守っているかどうか？「わたしがあなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい。」という戒めを守っているかどうか、にかかっています。